

---

# アリスマティック

星伝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アリスマティック

### 【Nコード】

N4710I

### 【作者名】

星伝

### 【あらすじ】

季節は春。僕“更 歩夢”は今日が高校入学式の成り立て高校生。学校へ向かうため双子の夏海と電車に乗って登校しようとするが、電撃事故に巻き込まれて・・・。ごたごたのうちに魔法学校へ通うことに！？しかもそこは女子校で！？え、女子校だから女子になれって！？いやいや、ありえないから・・・。男のボクが女になって魔法女学校生活。コメディ・シリアス・アクション様々な要素が詰まった僕の学園生活を描くアリスマティック、お楽しみください。

はじめにお読みください。

はじめに

本作品は作者の娯楽と妄想から生まれたただの小説です。

何かつじつまが合わないなど気がついた点がありましたらコメント欄に書き込んでください。

暇があれば返信して、修正したいと思います。

また、感想等がいただけると、とてもありがたいです。

もちろん、アドバイスを大歓迎です。

登場人物・語句説明のページは随時更新していきたいと思います。何この人！やこの単語の意味話からねえ！！などがあれば、こちらをご覧ください。

そこにもものっていない場合はコメント欄にでも・・・

もちろん、伏線などにはお答えするわけにはいきませんのでご了承ください。

他にもお気づきの点がありましたらコメント欄へ。

それでは、本作品“アリスマティック”をお楽しみください。

もし、人に見られたくないなどの意見・感想等がございましたら下記のメールアドレスにお送りください。

starlinks|star\*yahoo.co.jp

(\*を@に変更してお送りください。)

作者：星伝

## 登場人物（前書き）

このページは登場人物を紹介するページです。

あたらしい人が登場するたびに更新していききたいと思います。

何かありましたらコメント投稿欄へ。

## 登場人物

### 登場人物紹介

更 さい 歩夢 あゆむ

主人公。

男らしさのカケラもなく、顔、声、仕草共に女っぽいところがある。

容姿自体も双子の夏海ににて、女っぽい。

更 さい 歩夢 あゆむ

主人公の女バージョン。

学園に入学するに当たって、名前の呼び方を変えた。

更 さい 夏海 なつみ

主人公の双子の妹。

元気少女だが、めんどくさがりな一面も。

主人公をいじってあそぶのが好きだが、なかなか繊細な部分も・

秋山 あきやま 文江 ふみえ

はじめは主人公の主治医として登場するが、本当の職業は新アイリス学園の理事長。

副業としてアイリス専属の医者もやっている。

少し男気な言葉遣いの部分もある。

## 語句説明（前書き）

ここは作中に出てくる語句を説明するページです。

わからない単語や特殊そうな単語等を説明していきます。

もちろん、読者の皆様からの語句への質問もここでお答えします。

なにかありましたら、コメント欄へ。

このページは随時更新していきます。

## 語句説明

### 魔法

何か精神的なものを使って起こす奇跡の技。

精神的なものといっても、人それぞれである。

作中では精神エネルギーとぼかしたり、寿命とはつきり書いたり  
と、まちまちである。

よくわからないが、奇跡の技、とでもおもっていただければ・・・

### 新アイリス女学園

主人公達を通うことになる学校。

国際地球防衛基地の重要ポイントでもあり、前線メンバーである  
魔法少女達を育てる場所でもある。

普段はただの学校であり、校門から見た感じも普通の学校なのだ  
が、実は孤島にある学園島なのである。

### ミラージュ

未確認飛行物体（UFO）のこと。

数十年前に飛来してアフリカ大陸を破壊してからは人類共通の敵  
である。

まだまだわからないことばかりの謎に包まれた存在。

生き物であるのかもわからない。

## プロローグ／人生の転機

ポーンという音が駅のプラットホームに響く。  
案内板を見るともうすぐ僕が乗る電車が入ってくるようだ。

「夏海<sup>なつみ</sup>、もうすぐ来るみたいだから並ぼう。」

「うん。」

双子の妹である夏海が携帯でテレビを見ながら気のない返事をする。

彼女の服装はありふれた紺のセーラー服だった。

各いう僕も紺の詰め襟だ。

今日は高校の入学式だ。

受験の時をのぞけば初めて学校に入る日でもある。

「なんかおもしろいのかも合った？」

あまりにも夏海がテレビにのめり込んでいるので聞くと彼女はイヤホンを抜いて音が聞こえるようにした。

「今日から新学期ということでここ新アイリス魔法学校にもたくさん  
さんの新入生が入学します。政府によりますと、今年の入学人数は  
例年より多いとのこと。戦力増強が望めると喜ぶ一方、防衛費のか  
さみに一憂しているようです。」

新アイリス魔法学園。

世界でも4つしか存在しない魔法学校で、その中でもトップを誇る  
国立高校と大学である。

魔法が女子しか発現しないことから自然と女学校となり、ミラー  
ジュに対抗できる唯一の手段として 地球防衛基地としての役割も



果たしている。

ミラージュとは、数十年前から地球に飛来してくる未確認飛行物体のことだ。

未だにその実態はつかめていないが、最初の襲来の時、ミラージュがアフリカ大陸に攻撃。

アフリカ大陸は人の住めない死の世界と化した。

ゆえに国連は地球防衛軍を結成、ミラージュの破壊に乗り出した。その最先端がアイリスを含めた魔法学校というわけだ。

「夏海、やっぱりこういうのに興味あるの？」

「ううん、ただアイリスの制服って可愛いんだよね。」

「なんだ、制服に興味あるのか、…もしかして制服フェチゆぼぶあー！」

「変な事いうな！」

ぐ、グーで殴られた。

「ま、着る機会なんてないんだろうけどね。」

「いや、そうでもないだろ？お前魔法使えるんだから僕に合わせずにアイリス受験すればよかったじゃん。」

「うーん…私あんまり魔法好きじゃないから。」

「…お前まだあのこと気にして…！」

「あ、電車は行ってきたよ。あそこ誰もいないから並ば。」

はぐらかされた。

仕方なく僕は夏海の後ろに並んだ。

電車の走る音がホーム響きはじめる。

もうすぐ先頭車両が通というときに。

「えっ？」

誰かに背中を押された。

勢いを殺せずに僕は線路上に投げ出された。

もう目前に鈍い光を放つ鉄の箱が迫る。

何か夏海が叫びながら僕に手を伸ばそうとするがどう考えても間に合わない。

甲高いブレーキ音が響くがとつてい間に合いつこない。

地面に足が着く前に体が鉄板に触る。

ああ、これは死ぬな。

けど、死にたくないな。

出来ることなら生きたい。

そう思った瞬間、目の前が白く塗り潰された。

鈍い痛みを感じながら僕は意識を手放した。

\* \* \* \* \*

「いい、歩夢。もう二度と魔法を使っちゃダメだよ?」

僕のお母さんが泣きじゃくる僕の頭を撫でながら言った。

「うつ…くすつ…なんで?」

「歩夢のためなの。お母さんからのお願い。約束できる?」

「…うん、わかった。お母さんがいうなら約束する。」

「そう、いい子ね。」

にっこりほえまれて僕も思わず笑った。

目に涙がまだ浮かぶが、それもじきにとまる。

「歩夢は偉いから、これあげるね。」

渡されたのは青い腕輪。  
それを僕の腕につける。

「お守りだからいつも身につけていてね。」

「うん、わかった。」

そのあとしばらくお母さんと一緒に笑いあっていた。

ガバツ。

そんな擬音が浮かび上がるような目覚め方をした。

ここはどこだ？

淡いクリーム色の壁にテレビ、花などがある部屋だった。

「…病院か。」

枕元にある人工呼吸器等を見て思い至る。

「…生きてるのか。」

口から漏れた言葉に状況が飲み込めはじめた。

しかし、悪運が強いよな。あれだけ盛大に電車でひかれたのに、生きてるなんて。

なのに意識があるどころか、少し倦怠感があるだけで体はびんぴ

んしている。

「えっ？ぴんぴん？」

そこで事の異常さに気付く。

何で電車にひかれたのに無傷なんだ？

あの状況で電車から逃れるのはむりだし、電車に触れた痛みも感じた。

唯一考えられるのは。

「…魔法か。」

奇跡の力しか思いつかない。

しかしなら、誰が？

夏海か？

いや、でもあの状況で夏海が魔法を使えたとは思えない。

なら、誰が…

思考のループに陥りそうになったとき、コンコンと部屋のドアがたたかれた。

「失礼します。」

入ってきたのは夏海だった。

「あ、目が覚めたんだ。」

起き上がっている僕を見て夏海は安堵したような表情をした。そりゃそうだろう。

肉親が電車事故に会うなんて、たとえ見た目無傷でも心配しない

ほづがどうかしてる。

「あ、いま先生呼んでくるね。」

「たたた、と夏海は僕が口を挟むまもなく部屋を出ていった。しばらくすると見知らぬ白衣の人と夏海が一緒に入ってきた。」

「私が君の主治医の秋山です。よろしく。」  
「よ、よろしくお願いします。」

若い女医だった。

顔がやたらに整っていて、そこらの女優よりもよほど綺麗だ。

「よし、どこも以上なさそうだ。」

聴診器やら血圧計などをしまつ。

「それで、歩夢<sup>あゆむ</sup>くん…でいいのかな？」

僕がコクリと頷くと彼女は話を続けた。

「君は事件…もとい、事故のことは覚えているかね。」

「覚えてるっていうか、電車にひかれたところまではうすつらと。」

「そうか、…ならあれが事件だったということは知らないんだな。」

「事件って…」

「あれは無差別殺人だったというわけだ。」

「…」

無差別殺人つて…つまり、僕は運がなかったと。そういう事か。

「驚かないんだな。」

「ええ、何となく誰かに背中を押されたのは覚えていますから。」

「そう…なら、あなたが魔法を使ったっていったら？」

「…」

いま、この人何て言いました？

僕が魔法を使った？

お母さんとの約束を破った？

「あら、なんか反応が違うわね。」

「えっ？」

秋山先生が興味深そうにこちらを見る。

「私、男の人が魔法を使うっていうほうに驚くかと思ったのに、なんかまるで使えることは知っていて、それを使ったことに戸惑いを感じてるみたいに思えるわ。」

す、鋭い。

もしかしてエスパーか？

魔法もあるんだから超能力くらいあってもおかしくない。

「まあ、そんなのどうでもいいわ。」

いいのかよ。

「ねえ、あなた。アイリスに転校する気ない？」

「アイリス、ですか？」

「そうよ。」

なんかすごい事いわれたような……ていうか、

「僕男ですよ！女子校に行けるわけないじゃないですか。」

「ああ、それならなんとでもなるから。」

なるのかよ！

いやいや、なるはずがない。

男が女子校にいるなんて、……ばれたら犯罪だ。

「けど、アイリスって全寮制ですよ。家に夏海を一人にするわけには行きませんかから。」

「そう、」

すると彼女は何かを悩みはじめる。

しかし、すぐに解決したのか、顔をこちらに向けた。

「なら、夏海さん、あなたもアイリスに来る？それなら文句ないでしょ？」

……いや、文句あるとかないかそついう問題じゃあ。  
ていうか、

「勝手にそんなこと決め手いいんですか？」

普通、会議や審議なんかするんじゃない、

「いいのよ、だって私、あの学園の理事長だから。」

…なんか今、今までで一番すごいこと言われた気がした。

\* \* \* \* \*

そんなやりとりがあったのが、数日前。  
あれから僕は色々精密検査をされた後、即退院となった。  
それから色々夏海とも話をして、

「今日からここに通うのか。」

目の前にそびえる校門を見上げる。

煉瓦造りのような柱にはその場所が書かれていた。

“新アイリス魔法女学園”

今日から僕と夏美はここの生徒となる。

↳ the prologue is end, and to be  
e continue ;



第01話 - - 1 - - (前書き)

二ヶ月ぶりの投稿です。

一応、サブタイトルは決めていません。

後日、第1話の全貌が見えてきたところで付けたいと思います。

## 第01話 - - 1 - -

### 第01話

- - 1 - -

私立新アイリス魔法女学園。

世界でも数少ない魔法学校の中でもトップレベルに位置する学校で、その学校が置かれている場所は未だ一般人には知られていない。それもそのはず。

学校の校門は東京のど真ん中にあるのに、学校自体は別の島にある。

魔法によるテレポートだ。

ゲートが学園までのテレポートの装置で自分の身分証名称と政府が発行した許可証を使うと、システムが起動し、アイリスまで跳テレポートばしてくれるのだ。

どうしてそんな場所にあるのかというと、理由はかんたん。

魔法というその特別な力のため、危険性や機密性を考え、あえて人気がない場所に学校を建てた。

ただそれだけ。

しかし、そのためというか、魔法などに関係のないただの一般人は影も形もアイリスをみたものはいない。

アイリスの生徒にどのような場所かマスコミが聞こうとするが学校自体が全寮制のため、学校に所属している生徒には肉親や姉弟でもない限り合うことは出来ない。

だから、僕と夏海は今回初めてアイリスの土地に踏み込んだのだが、テレポートが終わった後に見えた景色に思わず口をポカーンと開けてしまった。

「……ここ、アイリス女学園だよね。」  
「……うん、そのはず。」

あえて女学園の部分を強調して聞く。  
しかし、返ってきた答えは肯定。  
だって、目の前に……

「……町、だね。」  
「うん。」

「……あ、あそこにマクナルドの看板がある。」  
「……あっちにはスターツクスもあるよ。」

大きなM字の赤い看板や緑色の丸い看板を思わず指さす。

「……で、学校はどこ？」  
「……」

今度は返事がなかった。  
隣をみると夏海はそっぽを向いて鳴りもしない口笛を吹いていた。  
分からないという事だ。  
少し背伸びをして遠くまで見ようとするが、学校らしき建物は影も形も見えない。

「どうしようか。」  
「……」

「……こいつ……シカトかよー!!」

「あ、あの、すみません。さ、更さんご兄弟でしょうか。」

思わず殴りたい衝動に駆られていると、誰かに声をかけられた。

「は、はい。」

慌てて握っていた拳をといて声の方を向く。

小さな女の子がすぐとなり立っていた。

とにかく小さな子だった。

身長は150cm・・・あるのだろうか。

もしかしたらないかもしれない。

長い髪が膝まで伸びている。

「あ、私小日向こひなた みゆ心優といいます。秋山先生の使いでやってきました。」

「秋山先生・・・ああ、あの理事長ね。」

「はい。学校までお連れするように言われました。」

「わあ、ありがとうございます。実際困ってたから助かるよ。」

「そ、それではこちらです。」

小日向ちゃんは僕たちを誘導し始め・・・

「イタっ!!！」

五歩でこけた。

「だ、大丈夫!？」

慌てて駆け寄って、体を抱き起こす。

幸い、どこにも怪我はないようだ。

「は、はい。すみません!!！」

慌てて僕の腕から抜け出し、ぺこぺここと頭を下げられる。  
な、何か可愛い!!  
思わずなでなでしてあげたくなるなあ。

「あ、あのっ!」

「んっ?」

小日向ちゃんの困惑した声にホワーン、とした気持ちから現実  
引き戻される。

そして、自分がいつの間にか彼女をなでなでしていたことに気づ  
く。

し、しまった。

考えただけで、勝手に体が動いてしまった。

「う、ごめん。」

慌てて手をどけると彼女はモジモジとしながら顔を赤くしてい  
た。

「……ロリコン。」

後ろから聞こえた冷たい声に背筋が凍る。

ギギギッと後ろを見ると白い目で夏海が僕を見下ろしていた。

「な、夏美さん?」

「スケベ、変態、痴漢。」

容赦ない罵声を浴びせられる。

こ、コレは、適当に話を逸らすしかない。

「こ、小日向ちゃん、早く学校に行こう。ほら、夏海も。」  
「は、はい。」

小日向ちゃんは夏海の迫力に押されてびくびくしながら先導を始めた。

「・・・バカ。」

その後ろを僕と夏海はついて、学校に向かった。

\* \* \* \* \*

僕は学校に向かうまでこのことを聞いた。  
ここはもちろん、今僕たちが歩いている町のことだ。

「アイリス女学園があるのは東京ではないと言っことは知っていますね。」  
「うん。東京には門だけがあるって。」

先ほど僕たちが通ってきたところだ。

「では、学校自体はどこにあるのか。その答えは島です。」  
「島？」

「はい。確か、日本の本州からだいたい30kmほど離れた場所に浮かぶ島だと聞いたことがあります。」

「30kmって・・・かなり遠いんだね。」

「まあ、扱っているものが魔法というものですから。それは仕方

がないことだと思えます。それで、その島の形は六角形を思い浮かべてください。」

「はい。今私たちがいるのはその六角形の北端にある角、ファーストコーナーと呼ばれる場所にある町、“桜街”<sup>さくらがし</sup>にいます。この桜街が、この島の唯一の町であり、学生や職員の娯楽や生活必需品などを置いています。もちろん、インターネットを使って通販も出来ますが、荷物は一度学校側の検査が入るので注意が必要ですな。」

「検査・・・やっぱり荷物検査とかはあるんだ。」

「はい、やっぱりこんな所ですから。」

先程言っていた魔法を扱っているところ、という意味だろう。それにしても、小説や漫画みたいな所だな。

「この島は七つの区画に分けられます。先程の桜街が北端。そこから西に下っていくと、各コーナーごとに学生街・・・もとい学生寮の住宅が建ち並び、森を挟んでアイリス特別軍事基地と遊園地、そして南端に研究棟が建ち並んでいます。」

「遊園地？」

僕の後ろにいた夏海が聞き返した。

「はい、この島には遊園地もあるんですよ。メリーゴーランドや観覧車はもちろん、ジェットコースターやお化け屋敷、あげくにはプールやスケートリンクも完備してます。」

「・・・ここって、言うなれば、学園私有の島なんだよね。」

さっきの話からすれば、そう推測できる。

そんな場所に遊園地とは・・・

「はい、この島はアイリスの私有地ですが、生徒や職員もたまに

は息抜きの場所が必要だ、という理事長の考えから遊園地が出来たと言われています。」

「へ〜。」

いきぬき、ねえ。

この年になつてまで遊園地でハッスル。

・・・ちよつと考えにくいかも。

「で、次は桜街から東に降りていきますね。まず、同じように学生寮が並ぶ住宅街があつて、その下には大きな自然公園があります。この自然公園は本当に何も無い、ただの草原が広がっている場所なんですけど、休日なんかはけっこう生徒でにぎわったりするんです。」

「なぜ？」

普通、桜街に来てゲーセンやカラオケだろ？

「まあ、なんといいですか・・・ゲーセンやカラオケは飽きてしまつて、自然が恋しくなるんですね。不思議と・・・かくいう私もその一人です。」

「かくいう私もつて・・・小日向さんは僕たちとおなじ一年生じゃないの？」

身長やししゃべり方からそう勝手に思つてたんだけど・・・

「ち、ちがいます！！私は二年生です！！あなたがたの先輩でしゅつ！？」

あ、舌噛んだ。

口を押さえてぶるぶるしてる・・・



耳まで真つ赤にして・・・か、かわいいっ！  
思わず夏海と温かい目で見守ってしまう。

「こ、こほんっ。話を続けます。で、さらに東を下っていくと“  
深霧しんむの森”があつて、南端に、先程も言った研究棟が建っています。

「シナムの森？」

なんだそりゃ。

「深い霧、と書いて深霧と読みます。まあ、普通はこんな読み方  
しませんけどね。ちなみにそこは関係者以外立ち入り禁止ですので、  
私達も許可なくはいることは出来ません。」

「立ち入り禁止つて・・・何かあるんですか？」

興味深そうに夏海が聞く。

我が妹はこういう“ダメ”といわれたことにすっごい興味持つか  
らなあ。

「さあ？・・・ただ、入ろうとした生徒がいたそうですけど、た  
いがい先生に見つかるか迷って数日してから帰ってきた生徒が大半  
でしたね。」

「・・・気をつけよう。」

「うん。」

心の中で、絶対にそこには近寄らないと固く誓いながらしばらく  
歩く。

すると、小日向ちゃ・・・先輩は屋根のあるところで止まった。

屋根の下には看板があつて・・・時刻表がある。

つまり、ここはバス停のようだ。

学校の中にバス停・・・ドンだけの規模だよ!?

「あ、来ました。あのバスに今回は乗ります。」

そう言っつて、目の前に止まったバスに乗った。

中は僕たち以外誰も乗っていなかった。

「この島を走るバスは全て無料です。バスは全部で三路線あります。一つめが一番の東回り循環バス。これは東側の学生寮が始発で桜街、学校、研究室、深霧の森、そして自然公園と回って、再び学生寮に着きます。二番のバスが西回りのバスです。こちら西の学生寮が始発で桜街、学校、研究施設、遊園地、基地と回って再び学生寮に戻ってきます。最後が三番の外回りです。これは学校を経由せず、桜街が始発で西の学生寮、基地、遊園地、研究施設、深霧の森、自然公園、東の学生寮と回って、また桜街にもどってきます。この三路線が島を回っています。もちろん、今言ったのと逆向きもあります。」

小日向先輩はバスの中に貼ってあったチラシを指さしながら説明してくれる。

「他の詳しいことはその時になったらクラスメイトや友人に聞くといいと思います。もちろん、私でもかまいませんよ。私は2年4組応用科の生徒ですから、いつでも尋ねてきて下さい。」

お世辞だろうが、気にかけてくれている証拠なので、素直にお礼を言っつ。

その後、色々との話などに花を咲かせながらしゃべっていると、いつの間にか学校に着いた。

「ここが、私立新アイリス魔法学園です。」

バスから降り立ったところが学校の校門前だった。

“新”という割には古めかしい・・・言い換えればレトロな感じの校門だった。

レンガ造りの高さが3mはありそうな柱。

普段はその間をふさいでいるであろう黒光りした堅牢な扉。

いや、扉と言うよりは柵だろう。

今は開いているそこからレンガの道が続いて、その先に大きな建物が見えた。

おそらく校舎だろう。

ここからでは何とも言えないが、少なくとも3階以上の高さがあるように思える。

「こちらです。」

小日向先輩は僕たちをその建物の中の一つの部屋に連れて行った。上に下がっている木製のプレートには“学園長室”と書かれていた。

「失礼します。」

コンコンと先輩はノックすると扉を開けた。

中に入ると、秋山先生がいた。

ソファーに寝っ転がり、たばこを吹かしている。

「・・・先生。」

あきれたように小日向先輩がため息をつく。

「よう、お疲れさん小日向。今飲み物入れるから座って待ってる。そっちの更兄妹もだ。コーヒーでいいだろ。」

先生はたばこを灰皿に入れると立ち上がってポットに向かった。小日向先輩はまた一つため息をつくと窓の側まで行って、窓を開けた。

「ごめんなさい、二人とも。秋山先生こんなんだけど、本当はい人だから。」

「本当はってなんだ！！本当はとは！」

先生はわめくが、小日向先輩はスルーして、先ほど先生が寝転がっていたソファアに座る。

「二人とも、立ってないでそちらに座ってください。」

指さされたソファアに僕と夏海は並んで座る。

すると、カチャツと目の前にコーヒーカップが置かれた。中には灰色の液体・・・コーヒーが入っている。

「ミルクと砂糖は好きに入れてくれ。」

先生はそういうと、自分もソファアに座って、コーヒーに口を付ける。

僕たちもそれに倣う。

「まずは、体大丈夫か、更兄。」

「はい、大丈夫です。」

「そうか、なら平気だな・・・。」

「・・・？」

今何か一瞬、先生の顔がにやけた気がしたのだが・・・

「・・・どうした、私の顔に何か着いてるか？」

「いえ、べつに・・・」

特に変化はない。

気のせいだったんだろう。

「入学に必要な手続きはこっちで全部済ませた。これがその証明書と学生証だ。なくすなよ。」

「ありがとうございます。」

「もちろんです。」

書類の入った封筒と学生証を受け取り、夏海の顔写真がつい他方を彼女に渡す。

「この島の地理はもう頭に入ったか？」

「はい、小日向先輩にだいたいは聞きました。」

「そうか・・・あ、一つ言っっていくが、東の“深霧の森”には入るなよ。」

「“深霧の森”ですか。自然公園の南側にある・・・」

「ああ、あそこは関係者以外立ち入り禁止になっている。もちろん、普通は入れるはずもないんだがな。」

「分かりました！」

目をきらきらさせながら夏海が威勢良く返事をする。

・・・こいつ、絶対入る気だ。

先生もそう思ったのか溜息をつく。

だが、それ以上何かを言う気はないようだ。

「あとは・・・ああ、おまえらは1年B組に入ってもらおう。」  
「二人共ですか？」

僕の質問に先生は是と返した。

「何かあった時に、更兄の横に更妹がいた方がいいからな。」  
「何かあって？」  
「・・・・・・・・・・」

なぜか先生は黙った。  
というか、なぜ黙る。  
何か起きると言うことが前提なのか!?

「えっと、あとは・・・」  
なんかすごくわざとらしい。

「自分の教室や他の教室の配置は封筒の中にある見取り図をみれば分かる。他の設備とかは同級生にでも聞けばいいだろう。ほかは・・・ああ、特別カリキュラムがあったな。」  
「特別カリキュラム？」

さっきとは違ってかわって、夏海はいやそうな声を出す。

「ああ、この学校は聞いての通り魔法学校であり、軍学校でもあるからな。他の学校とはひと味もふた味もちがう授業がある。」  
「うへへ、どんなこと学ばされるんだよ。」

「そんなに難しいことじゃないですよ。秋山先生はいつもこういって生徒の反応を楽しんでるだけです。せいぜい厳しいのは魔法の授業ぐらいですね。」

「魔法……ですか。」

「はい。魔法の使い方の基礎から、独自の理論、さらには応用方法まで一から教える授業です。もちろん、実習もあって、それなりに人気の授業ですよ。」

魔法のことは母さんの約束があるから、あまり……いや、出来るならほとんど使わずに過ごしたい。

けど、この学校に来たからにはそう言うわけにも行かないだろう。あまり考えたくないから、思わず話題をそらす。

「……他にはどんな授業が？」

「そうですね。普通に国語、数学、理科系、社会系、英語、芸術はあって、後は体育の代わりに訓練があるぐらいですね。」

「……訓練。」

今までで一番いやな響きだな。

なんというか、さつき軍学校といったから何となく想像がつく。

「そうだ、訓練だ。ここでは命の尊さと、守ることの難しさを教え込んでやる！」

秋山先生が突然叫ぶ。

「いいか、そもそも線上では自分を守ってくれる存在なんていないと思え！！自分を守るのは自分だ！！自分の能力を上げておいて、死亡率を下げるのは当たり前のことだ！！」

「……なんて秋山先生は言いますけど、実はそんなに厳しくな

くて、ほとんど普通の体育と代わりありませんね。ちょっと、重火器の扱い方や大型車の操縦法とかを習いますが、ちゃんとした球技やマラソン、ダンスなんかも習いますよ。」

普通って・・・重火器や大型車の操縦のどこが普通だよ。  
十分危険なことじゃないか。

「おい、小日向！！おまえよくそんなんで訓練の授業をやってきたな！！教からこの私が直々に・・・」

「はいはい、先生の訓練に対する情熱はみんな知ってますから。それで、何か学校について聞きたいことはありますか？」

「えと、なら・・・」

夏海が小日向先輩に色々と質問を始めた。

「いったい、どこにそんなに聞くことがあると言っただろうか。」

「せいぜい毎日の中で試行錯誤していけばいいものを・・・」

「・・・それにしても、なんか眠いな。」

「なんとというか、体がふわふわとするとというか。」

「真の方から暖かい感じが広がっていくというか。」

「ん？更君、どうかしました？」

「僕の異常に気づいた小日向先輩が心配そうに聞いてくる。」

「平気ですと返事をしようとして、口がうまく開かないことに気づく。」

「ああ、更兄は平気だ。ちょっと薬を盛っただけだ。」

「なんか、すごいことを聞いた気がするけど、・・・ダメだ、頭がはたらかない。」



「ちよっ！？秋山先生、兄さんに何を盛ったんですか！？」

夏海、僕の呼び方が兄さんにもどってるぞ。

いつもは歩夢って呼び捨てだろう？

おまえは焦るとつい昔の癖がもどるのな。

あ、だめだ。

なんか、本格的に眠くなって・・・

「兄さん！！」

夏海がなんか叫んだ気がするが、返事が出来ない。

そのまま、僕は意識を手放した。

続く

第01話 . . . 1 . . . (後書き)

感想、誤字脱字はメール、感想レビューへお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4710i/>

---

アリスマティック

2010年10月10日11時41分発行